
輪唱伝奇 - Seltsam, dass Reinkarnation Legende .

MJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪唱伝奇 - Selt sam , dass Reinkarnation
Legend e .

【Nコード】

N08810

【作者名】

MJ

【あらすじ】

とある異世界。ある時、大陸の東端にある町が跡形もなく消え失せた。王国はその「何者」かに討伐命令を下す。そんな波乱の中、地下深くでは勇者の召喚の儀が…。

第壱話 「火の海に」

——或る瞬間だった。いや、その表現は正しくはないかもしれない。

だが、それ以外に的確な言葉など存在しないのも確かであった。我々が住む世界とは、少し違う世界。あるいは同じ世界の中にあるにもかかわらず、人が暮らしている社会とは、視点、価値観などが著しく異なっている異界なのかもしれない。

そもそも、時間という概念はなかったかもしれないし、あったかもしれない。

現代とは社会体制や文化が異なるパラレルワールドだろうか。いや、過去あるいは別の時代かもしれない。酷く不安定で矛盾だらけだが、もしもここが架空の世界の場合ならば其処への説明はどのように行なえば良いのだろうか。

ここはどこなんだろう。そもそも、この場所を知る者はいるのだろうか。

とある『王国』のある処に一つの村、集落が在った。

人の気配のない、陰鬱な森。太陽や月や星は雲におおわれ、光源となるものは門前の不気味な案山子が持つ小さな灯火だけ。

住処となる造物の数々は「人」によって動かされている。

日常。

平和な穏やかな日々。

そこには永遠に続くであろう豊かで賑やかな人々の暮らしがあった。

だが、それは唐突に突然、一瞬のうちに来た。

「始まり」が来たのだ。



一瞬の出来事だった。

村もヒトも建物も自然も無残にも焼け落ち、灰の一部と成り果てていた。

地面が火達磨と化した。

残ったのは肉塊だけが無残にも転がる転がる地面に転がる骸骨、亡骸、潰れた内臓、撒き散らされた下呂と糞尿。飛び出した肋骨。脊髄、流れ出す血と絶望全てを地獄と奈落で塗り潰し、死の臭いと狂気の灰が舞う。

「いづれにしても、ここが何処で、ここが何ていう村で今は何時であろうとどうでも良い。分かっていること、それはこの地域はお前で最後だということだ」

“骸の山”に“男”が一人立ち、そう言い放った。

年齢不明な、もはや性の判別すら付かなくなった屍の頭を頼張ると、呆然と目を見開いていた正面の少年にニヤリと不気味に歪な笑いを見せる。ぐちゃりぐちゃり、と湿った気持ち悪い血肉が噛み干切れる音と共に、地獄の一带に排泄物や腐敗臭に似た臓物染みた悪臭が漂い、骸の眼球が弾け、紐のようなものが大量に零れた。

少年は、しばらくそれが脳味噌だと気が付かなかった。いや、気が付かなかったと言った方が正確か。少年は、思考が支離滅裂に混沌とし瞳孔が上を向き、現実が「本当」なのかという事すら判断が付かなかった。

「……何か言い残すことはあるかね？」

それを知ってか男は、嗤いの表情すら隠さずにおぞましい声でそう告げた。

「何を言おうと殺すけどな」

聞こえてるか聞こえてないかも不明な「壊れかけた」少年に向かって。

病気、病的、残酷、狂気、屍、狂ってル、死神、化け物、死、末期的、殺戮、カニバリズム、身勝手、奇異、怪奇、終焉、異常、陰湿、鬼、凶、残虐、変態、絶対的、独悪、殺意……。

——魔。

書こうとすれば無限に負の言葉で表せるような光景が広がっていた。

だが、そんな事に何の意味があるのだろうか。

「悪魔」がいるこの火の海に。

『ころしてやる』『死にたくない』『誰かs助けて』『ころし憎てやる』『呪ってやる』『死にた喰くい』『死にた獄くない』『怨む』『死にたく殺ない』『死にた復讐くない』『死にたくな怨嗟い』『死にたくない』『ころ鬼してやる』『ころ死てやる』『ころして畜やる』『ころ生ろしてやる』

まるで最悪で悪夢を忠実に具現化したような光景だった。
もはやここに生きた“ニンゲン”は少年以外には存在しなかった。
他は全て灰か肉塊に成り果てて“男”によって喰われ“エサ”へと
惨めな姿に変えている。

この男に殺される――。

直視せずとも、少年の五感の全てがそれを証明していた。

少年の涙は既に枯れ果て、汗と血で感覚の無い背筋に悪寒が走り
続けていた。口の中に血の味がこびり付く少年の思考は支離滅裂に
なり唯一機能する感情は、

“恐怖” “恐怖” “恐怖” “恐怖”

痛みと意味不明な猛烈な寒気で今にも気が狂いそうになり、脳裏
に殺されるという危機感が駆け巡り、口は意味も分からなくなった
言葉を叫ぶ道具だった。

「な…な、か…仲間を、返、せッ！」

「何だつて?? あひゃひゃひゃッ!!!」

男はそれを聞くと歓喜に震え始め爆笑し始めてしまった。

男の身体はもはや、人間のものとはかけ離れた姿をしていた。

頭部には数本の頭角が剥き出しになり、目は充血し、今にも飛び
出そうに膨張し、充血し、顎は馬のように変形し、ギシギシと肉筋
の千切れる音を血走らせている。

両肩には赤子のような顔が数人浮き出し悲鳴とも怒りとも解らぬ鳴き声を発し、胸部には腫瘍、いやまるで女性の乳房のような物体が無数にモゾモゾと膨れ上がるように“産まれていた”。

少年の足腰は震え、”男”の異常さを伝える。

しかし彼は絶対に諦めてはならなかった。それは自分の「死」を意味していたから。

震えながら絶望と恐怖で壊れかけた心を奮起させようと男を睨みつけ、負けじと既に使い物にならなくなった剣、血で錆びたなまくら以下の棒を男に構えた。殺してやる。

「そうだ。そうでないと面白くない。それでこそ」

「黙れよ……黙れ黙れ黙れ黙れ——ッッ！！！」

男の顔はその間にも変形して人の原型を留めなくなりつつある。

「「コンナニモ私殺してハ」」

「「美シイノ厭二」」

「「ワカラナイカ」」

「「人間ノヨウ救ハ」」

馬とトナカイの顔を醜悪に合成したような形になり、両肩の赤子が悲鳴のような声で男の声を代弁している。少年はあまりの状況の異常さと恐怖に耐えられなくなり、“男”へ駆け出した。傷だらけの身体がこれまでに無いほどの悲鳴をあげるが、それでもその痛みに耐え、刃こぼれの激しい剣で赤子の顔に斬りかかる。

ガキインッ！！！！

「ひっ!？」

「無駄無駄無駄アアアーーーーッ!」

しかし男は、少年の剣が振り下ろされるのにも、微動だに反応する事も無く、その攻撃を受け止める。左肩の赤子が鋭い歯で、刃溢れした剣を噛み砕いていた。

呆気なく無残に無慈悲にも粉々に折れ、行き場の失った勢いの反動で少年の身体は地面へと叩きつけられる。

「マダソンナ物ガ!」

「効クトデモ??」

「本当ニ醜イ!」

「頭ガ弱スギル…イルカノ物真似ヤツテンノ?」

“男”と赤子達は笑った。嘲笑う様に貶すように。それは弱りきった人間を闇の釜底に叩き落すには十分すぎる所業だった。

少年の子供特有の純粹無垢な顔は老人のように恐怖に歪む。惨めな芋虫の様に転がる少年の真下まで近寄りながら、必死に動こうともがいていた少年の右足を踏み潰した。

彼の全身に足の潰れる激痛が走る。血が雨のように吹き出し“男”を醜惡に染め上げる。

「■■死■■■■殺意■■ーーーーッ!」

少年の身体は、痙攣を起こしたように飛び跳ねる。

あまりの痛みに頭の中が真っ白になったのか、何も考えられないのだろう。視界が滲んだようにボヤけ、光の在った瞳は薄汚く濁り腐る。儚い壊れかけた心は完全に碎かれ、生気の失った人形のように

な視線は、自然と反対側の左足へと向う。

右足の骨が砕け粉々になり、筋と肉片は周囲に飛び散って左足にも残骸が染め上げる。もう少年の右足が元に戻ることはないだろう殺してやる。

もはや少年は完全に壊れ狂っていた。

すぎるように残骸となった右足を愛おしく虚しく見つめる。

「全くモツテソノ鳴キ声」

「何度聞イテモ」

「素晴ラシイ」

「気分ガ悪クナル程」

“男”の笑い声は止まらず滑稽な物を見る目で少年の残された足を躊躇なく踏み潰す。ブシャアアア、とまるで風船が果実を飛び散らせる様に音を立てて右足と同じような無残な姿へと姿を変える。少年は目を見開き叫び狂う。

「ツアアハアハアはははアひはははッ！！！」

表現も出来ない様な叫び声と笑い声で少年はのた打ち舞い、歓喜にも似たダンスを踊る。もはや痛み感覚は麻痺したのか全身の感覚が無いのだろう。

少年は頬を紅く染め上げ舌をみつともなく垂らし涎を溢し惚悦と羨望の目で“男”をまるで愛おしい物を見るように睨み眺めていた。

「オホー」

「好イ声ダ」

「ソウダ鳴き叫べ」

「モットモットモット」

その慈悲も救いも無い言葉に少年は狂った笑いと憎しみと快楽を混沌とさせた悲鳴、いや絶頂の瞬間に涙と失禁で歡喜に震え出す。動かない身体で必死に“男”の足元へと這いずり、苦しみから逃げようとする。

魔性と死神によって支配された少年の脳内で何度も繰り返される快楽と絶望、煮えたぎる何か。必死で肉の見えている両手を動かし、少年は屍の山となった地をズルズルと這いずりただひたすら逃げた。絶望と恐怖、苦しみから。

それは数時間だったのか、数秒だったのかは分からない。

永遠のように感じる時間の中、醜い汚らしい媚をへつらう様な憎き敵にすら縋るよう穢れた歪んだ少年の笑顔。

それを見下す“男”のゴミを見る蔑む爆笑の狂宴。

それは突然最後を迎えた。

少年の顔、額に誰かの屍の残骸がグチャツと音を立てて落ちてくる。

それは、液状に潰された足の一部だった。

少年の物だろうか、もはやその分別は少年には不可能だ。顔全体にそれは広がり血の泥に塗れた少年の顔は淫らと言っている程、捕食者をそそらせる。

少年と“男”はニヤリと血生臭い口を開き湯気を漂わせる。

少年は血だらけ餌と成り下がり、滴る血を舌で口周りを舐め目の前の化け物を見上げる。“男”も牙で包まれた口を開いていた。

待っていたかのように“男”の顔、化け物の姿が覗き込む。

「ゲーム」

「オーバアアーーーー!!」

少年の視界は真っ暗になり、意識は途絶えた。

ここが、どこ何ていう世界なのか。
少年は誰で男は何者なのか。

万が一にもこの場所を知る者がいて、ここへたどり着いたとしても、ここが何処なのかはまったく覚えていないのだろう。
仮に覚えていたとしても、彼らはきつと『あの村』は自分の意思ではたどり着けない『神秘』なんだと感ずるのだろう。

通常の思考なら認めようとはしない。
普通の論理なら馬鹿馬鹿しすぎて、まず考えないからだ。

この「砂漠」がこの焼け野原が、この村のあつた場所である事を、
たった一人の男が総てを破壊してしまった事を。

大抵、『物語』が廻り出してから始めて、伝説は始まるモノらしいのだ。

幕開け（１）

「また村が一つ、壊滅したらしい……」

「やだねえ、これで三度目じゃないか」

『栄光の王国』

王国の、白く光照らす白銀の城壁の下には、民族的な岩石造りの家々が狭く重なる様に建造され、壁の前に一つの都を栄えさせる。城下町の外れにある、一つの酒場で二人の男と女が閑散とした店内で雑談に花を咲かしていた。女は肩まである銀髪の髪を靡かせ、黒髪の男と古びた木のテーブルで向き合っている。女は十代後半といった所で、黒髪の男は目の前まであるフードを被っているため、顔は見えない。

「あんたならやった奴ぐらいはもう解ってるんだろ？」

「さあさねえ……私の所にも噂ぐらいいは流れてくるけど胡散臭いったらありゃしないさ」

彼らの話題はお世辞にも穏やかとは言えなかった。

女は酒場の古びた壁に目を配る。そこにはびっしりと貼り付けられた“討伐依頼”“徴兵命令”の紙の山。呆れたような顔でウンザリとした表情を隠しもせずにそれを顎で指す。

男はそのジェスチャーで女が伝えたい意志を理解したようだ。その紙の全てが今回の騒動の件だという事を察した。

「王国直属騎士団、実験精鋭部隊、その他諸々の傭兵に加え辺境の貴族の諸侯軍までね…化け物でも狩るつもりなのか？こいつら」

「その質問はこの厄の元凶にでもしな。ウチは客がいなくなつて大損赤字さね」

「それにしても、報酬の額が常軌を逸してるな。あのケチ臭いギルド（幹旋所）でさえ、数ヶ月は暮らせる報酬金を出すみたいだし。他も似たり寄つたりだが、王国の討伐軍が一番酷いな…ざっと傭兵の年収はあるぞ…」

「ああ、それはさな。肝心のやつた奴を見た奴が一人もいないのさね。」

南の新興国家の殲滅隊、ドラゴンの群の襲撃、共和主義の革命軍、色々アホらしい仮説は立つてるが、敵を見た奴が一人もいないなんて、今回は本当に異常、危険さね。宮廷の雀も騒然と混乱を極めるよ」

彼女は所謂、情報屋であつた。

「俺がいない間にそんな事があつたのか…」

「間違いなく化け物には違いないさね……そうだ、あんた、旅に出てたんだろ？」

「ああ…色々とな古代遺跡つてのを調べててな……」

男はそう言いながら、女の前に“指輪”をテーブルの上に差し出した。鉄とも宝石とも解らぬ、白く艶のある光沢の素材で作られ、

上には一つの“眼”が刻まれている。何処か不気味な印象を与える奇妙な彫刻だった。

女はそれを見て気味悪いという顔をしながらそれをそつと掴む。

「“真実の眼”って呼ばれているらしい。なんとも安直なネーミングだけさ」

「あんたも変わってるさね。こんな物普通なら触りたくもないよ」

「確かに。持つてるとたまに誰かに見られてる様な気分になる」

女は理解出来ない、といった顔をしてその指輪を男に返す。男はそれを大事そうに右の薬指にはめ直す。

「だったら捨てるか、元の場所に戻すなり物好きに売っちゃったりとなんなりすればいいだろうに」

「一度は捨てようと思ったんだがな。言い伝えだと身につけていれば“魔の存在”に出会えるらしい。面白そうだろ？男なら一度は経験してみたいものさ」

「付き合ってられないさね。さて、そろそろ店じまいだ。こう変人しかいないと商売上がったりだ」

少しニヤけながら指輪に見惚れ始めたので、女は酒場の奥へと逃げるように席を立つ。相変わらず変人だなと思いつつも、女に違和感が駆け巡る。

「『魔の存在』ってあんた いったい何の話を」

女は慌てて振り返ってみるがそこに男の姿はいない。

急いで店の外に駆け出すが。しかしそこには跡形もなく、あったのは、テーブルに女への情報提供料の入った小袋と一枚の紙。

「…『エリス、足りない分は前の貸しで許せ』…って、水代にもならないよ、あんなのじゃ」

女は溜め息をついて男の座っていた席を見つめた。

まるで村を壊滅させた敵は「魔」という者達がやったみたいじゃないか。

夜も寝静まった頃、普段の「王国」であれば、城下町の端に建設された“門”に灯が燈され、下の繁華街では、旅人や兵士、商人達が酒を交わす。賑やかに性欲と暴力が支配し、娼婦たちはいい男を探すために所々でカモを狙い定める。

だが、今日はその光景は見ることはない。あるのは、閑散とした店々と極稀に見られる酒場。その中でさえ、客足は殆ど見られない。何故なら「王国」は正体不明の「敵」「化け物」を討伐するため男共は拳って出ていってしまったからだ。

「やっぱりさね。この村も、こっちの村もだ。決定的におかしい点がある」

「一番最初に被害に遭ったのは国境沿い最東端の村リオリス。漁村だ。」

繁華街から離れた場所にある寂れた酒場も例外ではない。そこにも客の姿はなく、一つの蝋燭の灯火に照らされながら銀髪の女は一人で地図や難解な書類を何度も読み返していた。

「そこから一週間も経たずに最南端の離れた地にある村が一つ消えている。…そして今回被害に遭ったこの村…」

地図には数箇所印が付けられ、彼女の指差す所には地図の最北端。

明らかに何か意図？それとも何かの偶然か？

大陸を何百年に渡り統べる「王国」をどうしようというのか。しかし判るのは途轍もない動乱が起きるという前兆の予感だけだった。

第式話 「異端」

「アララ」

「アツケナイ」

「コンナモノカ…」

「ハヤイナ」

かつて村のあった場所は灰と屍の山によつて絶望の海と化し、その肉片を積み上げた頂点には醜い化け物、かつて”男”だったモノが立っていた。地は血で紅く染まり、ワインのように美しく骨とも血肉とも判別の付かない死者の亡骸を醜く染め上げる。“男の”視線の前には一つの纏まつた肉塊の姿があった。

それは少年の末路。身体は彼方此方が弾け飛び、碎かれ、グチャグチャにすり潰され、酷く人から変質し、無理やり集められた肉の塊。もはやこれを人間の亡骸と形容するには何の要素も留めていなかった。ボコボコと”男”の両肩を這いずり回る無数の魔性の赤子の姿をした生物の”何か”が口々に言葉を失った“主人”の代わりに声を発していた。

それらはどれもが苦しみ、恐怖に支配された歪な顔だった。もし誰かがこの生き物が発するものが言葉でなく、捕食された人々の末路で永遠に続く悲鳴だと気づいたならばそれはもう一つの意味を持ち悲しく響く。

化け物の胸には女性の乳房のような物体が無数に膨れ上がり”産まれている”文字通り赤子達は肩から身体をズルズルと這いずり、この物体に群がる。そして時折り、この乳房のような物体は白い乳

液のような液状の汁を噴射させ、赤子の顔へと降り注ぎ、“彼ら”は歡喜の声を上げそれを飲み次第に悲鳴を上げなくなるのだ。

もはや“男”と表現することさえ烏滸がましい、“化け物”で“人智を超えた存在”あまりにも異常な光景、救いのない世界の姿。言葉だけ表現するには、何もかもが伝え切れない、そんな「奇異」な光景が広がっていた。

「「サアテ！」」

「「食べヨウカ！」」

「「最後ノ人間ダ！」」

“男”は醜く変質した“魔物”に似つかわしい口を広げた。針鼠のような鋭い牙が無数に歯となり機能し、それは臍物の腐敗臭を湯気を立て排気する。そしてその矛先は地に無残に広がった少年の屍へと向かう。

地に散らばり、無残にもバラバラとなった少年の肉片だったが彼の頭部だけは綺麗に残され屍の上に置かれていた。“男は”それを丁寧に丹念に“口”を広げ、一気に飲み込む。ビクン、と身体が打ち震える。気づけば無数の赤子達が歡喜の声を上げていた。それは、少年への同情か、それとも歡迎の意か。絶望への嘆きか。

オオオオオオオオオオオオオツ！

“男”の雄叫び、歡声が“村”に響き渡る。

「コンニチワ」
「ヨウコソ」
「イツシヨ」
「ゴメンネ」

赤子達も少年を歓迎してか口々にそれぞれ悲鳴の交じり合う声を上げていた。

屍で出来た地に一匹の化け物が吠え続ける。それは数時間、いや数日だっただろうか。しかしそれを知る術は何処にも無い。そこには現世の安らぎや善意と救いは存在せず、人間の優しさを証明する筈の人間は誰一人として存在しない、いや、真の意味で表現するならここはここは“美しい”世界なのだろう。

血塗られた地を響かせる「異端」の叫びが轟かせ、全てを畏怖させた頃、またボコリ、と“男”から肉の断ち切る音と共に新たな“赤子”が産まれる。それは少し小さく見え、どの赤子達も最初に露わにしていた酷く醜悪で恐怖に歪んだ顔をしていた、血の涙と共に

「サアテ、お前ノ為ニ」
「ココマデ」
「シタンダ」
「アガケ」
「セメテ、足元マデハ来イ」

“男”がそう嘲笑うと身体、と形容するには奇形すぎる末路。「魔性」の姿をドス黒く光らせ始める。「主」と「従者」の関係となった赤子の“物体”は血の涙によって黒ずんだ眼球を壊れる程に見

開くと、アアアア、と精一杯叫んだ。次第に「赤子達」は萎むように小さくなっていくと、それと共に“男”の骨格や醜い顔も崩れ始める。それらの肉片は口や目、鼻、肛門、考えられる穴と言う穴に侵入していき、身体は有り得ないほどに整い、そして美しくなっていく。そして最後には十代前半の「少年」の姿へ変化する。それは最後に喰らった壊れた少年の“容れ物”

「生意気にも我を殺しに來い。脆弱な人の勇者よ」

“男”、いや“少年”はニヤリ、と不気味で醜い笑みを浮かべた。

第参話 「シスター・ビッグマダム」

――勇者聖堂（教会堂）

「いいかー？ 坊や達！ 神さまは、信じるすべての民に対して『私のもとに來なさい』と呼びかけておられます。」

価値観の多様化が進む今、また変化の激しい時代の中にあっても、永久に変わらないもの、どのような時にも私たちの本当の支えとなるものは、異教徒共を犠牲にしてまでも、私たちを罪から救おうとされる「神の愛」なのです！」

「どのような困難に出会った時でも、誰からも理解されない時でも、また、誰からも助けを得られない時でさえなお、神は、私たちを愛し、共にいてくださるのです。」

この神を信じ、神のひとり子である、いずれ來たる救国主たらん勇者様を救い主と信じ、聖霊である神の導きを信じるのですよー！」

「はーい！！ シスター・ビッグマダム！！」

その日、昼前になると教会では黒いマントに白いベールに覆われた服装の修道女が、子供たちに説教を行っていた。

そこで何よりも特徴的なのは、修道女の体格である。

そのボディは、一見巨漢と見間違っほど大きい。

全長二メートルは裕に超えており、精錬され強靱に鍛えあげられたであろう筋肉が子供たちを見下ろす様子は、思わず今にも巨人に圧殺されようとしている小人たちを連想してしまうほどだった。

ただでさえ、バランスの良い筋肉が修道服の上からも見え隠れして、獣のような威圧感がある上に、女性とは思えないほど強面とその顔に付けられた黒い眼帯と相成って、見る者に圧倒的な畏敬を与えるその様はもはや怪物。

殺し屋でさえ、遭遇しただけで小便を漏らしかねない。

修道女、シスター・ビッグマダムは巨体であつた。兎に角、本当にでかつた。

「シスター・ビッグマダム、あの、質問があります」

しばらくして、子供たちの中の一人が、ビッグマダムが手を上げて疑問を投げかける。

メガネをかけた随分と痩せ細つた真面目そうな少年だった。

若干、震えているのは仕方ないだろう。

「どうしましたか、ヤシモ」

どうやら、少年はヤシモという名前らしい。

「いや、あの、あのですね、そ、その」

「聞きそびれた箇所でもありましたか、それとも」

ビッグマダムがヤシモを射貫くように見つめる。

いや、重圧があり過ぎて、もはや睨み付けているように見えるのは気のせいだろうか。

「ち、違、そうじゃない、ですけど」

「では、お腹でも痛いのですか？」

「す、すみませんっ！」

「では、どうしたのですか？」

「ひいっ！　ゴメンナサイ！　赦してください！　何でもないですう！」

ヤシモはあまりの恐怖に可哀相にガクガクと青ざめて土下座を繰り返しながら震えてしまった。

だがビッグマダムは、何故かそれを悪く解釈したのか、一段と凄みを増して、頭を地面に擦り続けていたヤシモを軽く持ち上げると、ヤシモの胸倉を掴み上げて自分の顔元へと寄せる。

「答えなさいヤシモ。　嘘つきは異教徒のはじまりですよ。　それともヤシモ。　貴方は穢らわしい豚のような異教徒なのですか？」

「違いますふゆ！　違います！　違います！　違います！　シスタ！・ビッグマダムさま！」
さあ！

「ならば、答えなさい。　違いを証明しなさい」

「ですからあ！　ですからあああああああ！」

「ヤシモオ！　貴方は男の子ではないですか！」

「うわあああああああ！――！」

小便を漏らしながら、断末魔を上げる少年と般若の形相でその少年にガン飛ばす巨人シスター。

その異様な光景はカオスその物だった。

周りもどうすれば、いいのか。そもそも、この神の仕え人を止められる人間がこの世にいるのか割りとは深刻な問題になりつつあったその時だった。

「その辺にしては貰えないか、シスター・ビッグマダムよ」

「おや、司祭様ではありませんか」

教会の奥から現れたのは、中年の青年男性。

小柄ではあったが、ビッグマダムと同じぐらいの背丈。約二メートル近くある高身長の人だった。

男は特徴的な細目を目先の修道女に向ける。

「あまり、ヤシモを虐めんでくれないか。その子はまだ少し大人に慣れてないだけだ。ヤシモはやましいことを隠しているわけじゃないさ」

「しかし……っ！」

「どんなことでも、少しずつ慣れていく。これが大人になるって事だろう。そして、それを教えてあげられるのは大人しかいない、違うかい？マダム」

「……私は言いすぎたようですね」

ビッグマダムは静かにヤシモを地面に下ろすと、イマイチ状況が

飲み込めていない様子のヤシモに今度は別人のように優しく微笑み、そつとてを頭に乗せて諭すように囁いた。

「ヤシモ。神はヤシモをお許しになるでしょう。後で私の部屋に来なさい、ヤシモ。美味しいミートパイがありますからね」

「？ はい！ シスター・ビッグマダムさま！」

ヤシモはボカンとしながら、立ち呆けながら答えた。

周りの子供達も何が起こったのか不明だが、とりあえず、シスターが珍しく優しくなってることに好としたのか、ヤシモの周りで騒ぎ始めている。

「？ あの子どうしたのでしょうか。やっぱり具合が……」

「大丈夫ですよ。シスター・ビッグマダム」

そう言って、二人はその場から離れる。

ヤシモは未だに訳がわからずか、ビッグマダムが司祭と彼の側を離れていっても、子供達と突っ立ったままだった。

「それで、今回の任務は何事ですか、司祭長フレイム・アンドワール様」

「楽しいよ、今度のは」

「17年ぶりの異端狩りだ」

ある少年はヤシモに不思議そうに尋ねた。

「なんで、あんなコト聞こうと思ったんだよ、ヤシモ」

「だって気になるだろ、アレ」

シスター・ビッグマダムと司祭長フレイム・アンドワールの後ろ姿を眺めながら、ヤシモは答えた。

「どうして、ビッグマダムは背中にあんな鉄の塊を背負ってるんだろっ」

シスター・ビッグマダムの巨体の背中にはその体よりも大きな黒き機関銃が装着されていた

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0881o/>

輪唱伝奇 - Seltsam, dass Reinkarnation Legende .

2011年11月24日16時47分発行